

北アジア世界における國家の類型

田村實造

目次

- (一) 北アジアの地域性と文化圏
- (二) 北アジアにおける歴史的世界の成立と展開
- (三) 北アジア世界における國家の類型
- (四) むすび

一 北アジアの地域性と文化圏

北アジアとは、地域的にいえば中國を中心とする東アジアと陰山山脈、祁連山脈、天山山脈などを境に、その北方に接する地區であつて、ここはモンゴル高原（モンゴリア）を中心に、東は興安峯をへだててマンヂュリアに接し、西はアルタイ山脈をへだててズンガリアから、さらに中央アジアの大ステップ地帯につらなる。北アジアは、いわゆるアジアの乾燥地帯といわれ、大半は草原で、その間に沙漠が散在するため、古來遊牧民族によつて占居されている。またステップの北方には、シベリアの寒冷な半濕潤森林地帯が北氷洋までひろがり、その間隙をぬうてイルティシユ、オビ、イエニセイ、レナ、黒龍江^{アムール}などの大河が北流ないし東流するため、毛皮獸の狩獵をはじめ、さけ・ます・にしんの漁撈に適する。

一方これに南接する東アジアは、中國本土を中心に東は朝鮮半島・日本列島、南はインドシナ半島、西はチベット・

東トルキスタンをふくむ。この地區には、パミール高原から放射状にでるコンロン山脈とヒマラヤ山脈とにいだかれた青海・チベット高原に發源する黄河、揚子江、メコン河などの諸河川が東流または南流して、流域にはそれぞれ肥沃な平野を展開し、そのうえ氣候は温暖であるため、植物はよく茂り農耕に適している。ここには中國民族を中心に、周邊に多くの少數民族が居住し、中國文化圏を形成しつつ四千年の歴史を發展させてきた。

以上によつてみると、中國を軸心とする東アジアと、モンゴリアを中心にする北アジアとは、その地域性の相異に應じて、そこに住む民族の生活様式も、前者が農耕生活であるのに對し、後者は遊牧ないし狩獵・漁撈生活というように全く異る。したがつて、かれらは社會・風俗・習慣・言語・宗教・思想その他あらゆる點で本質的に相異している。兩者は、それぞれ異なる世界を構成する民族であり、東アジアと北アジアとは、地域的にも文化的にも、また社會的にも別個の世界であるといわねばならない。

このように北アジアが、東アジアの中國的世界とは異なる特殊文化圏を形成していることは、すでに先史時代からみとめられる。たとえば新石器時代においても、中國の新石器とは異質的な細石器——剝片石器で、動物の皮はぎや骨切りや肉きざみなどに用いる——や、土器では櫛目文土器カムケラミツクが使用されている。この北方の細石器文化は、中央アジア、西アジア、北アフリカ、中部ヨーロッパへとつながる新石器文化圏の一部をなすものであり、また櫛目文土器文化はシベリア、北部ヨーロッパ文化圏の一環をなすものといわれる。もつとも南マンチュリアや南モンゴリアでは、細石器のほかに中國で見られるような石皿・環石などの打製や磨製の大型石器や有孔石器をはじめ、土器では繩蓆文土器や三足土器も出土するので、中國文化の影響もうけていたことは十分に推測される。

いまいつたような考古學的遺物の上からだけにかぎらない。歴史時代に入ると、かれらは中國側の記録を通じてではあるが、中國人のいわゆる中華的世界とは別の世界の民族として記載されている。まず殷墟の甲骨文字のなかに、北方民族

として土方とか苦方とかの部族名がみえる。これらは、いまの包頭附近から、さらにその西方にいた遊牧部族だと考えられている。周代になると、中原地方と北方ないし西北方の遊牧民族との関係は深くなり、尙書の牧誓篇、逸周書の王會篇をはじめ金石文（小孟鼎）、穆天子傳、國語、史記にいたる一連の資料には、東胡・山戎・犬戎（獯紂）・鬼方など大小さまざまな部族名がみえる。そして東周の世、すなわち春秋時代以後周室の政治力が失墜すると、これら北方・西北方の遊牧民族が中國本土に侵入して、北中國の北部一帯に占居することになった^①。

春秋時代に、攘夷が中國の覇權をめざす諸侯たちのスローガンになつてきたのも、このような情勢によるものである。それとともに華夷の別、中華と夷・狄の差別がやかましくなつてくるが、夷とか狄とかは、その字義はどうあろうとも、中國とは別の世界の住民、中國文化圏外の民族という考えからの差別である。毛皮をつけ乳酪を常食とし、天幕に住み騎馬して遊牧する北アジア民族に接するとき、中華的獨尊觀を固持する中國人としては、かれらを夷狄視するのは無理からぬことかも知れない。そのいみでは、中國人には日本人も東夷であり、最高の文化人をもつて任じるヨーロッパ人も紅毛夷にすぎなかつた。夷も狄も、それはあくまで中華的世界のうちで考えられるもの、中國的歴史觀にもとづく思想であつて、中國人の世界觀からすれば、夷も狄もやがて中國文化に光被され同化されるべき命運にあるものである。それゆえにこそ、同じ東夷であつたはずの靺鞨族の渤海も、中國文化に光被されれば「海東の盛國（文化國家）」と稱されたのである。ところが實際においては、北アジア民族は中國人が考えるほど野蠻な夷でも狄でもない。それはかれらの文化が、中國の文化とはその本質を異にするため、中國人の眼には文化——中國的文化——をもたない蠻族にうつたのである。なるほど思想・宗教・文學などのような精神的文化の面では、北アジア民族は中國人にとつてい比肩できないであろう。しかし衣・食・住など生活文化の面では、かれらの合理性は、中國人よりもむしろすぐれているといえよう。かれらは北アジアの地理的環境や生活状態に最も順應した様式を、長い間の生活體驗から創りだしている。このような、かれらの生活様式が、

今日のわれわれの文化生活のなかにも採り入れられていることを想起しなければならない。たとえば、かれらの固有の衣服は、その簡便さからヨーロッパ人に應用されて今日の洋服となり、中國人は數百年來かれらの袴ズボン子や窄袖ツツソデをそのまま借用していることを忘れがちである。今日の世界の文化人によつて愛好される肉食、バター、チーズなども、北アジア遊牧民の創製であることを思いださねばなるまい。また住居にしても、泥一式の中國人家屋よりも、かれらの圓形の毛帳オシトの方が、生活上はるかに合理的であることを、われわれは容易に理解できるであろう。これは要するに、かれらの生活文化が合理性に根ざしていること、草原の遊牧生活に順應するためには、その生活様式がいかに高度に特殊化されていたかを知らねばならない。

ただし北アジア諸民族は、中國人にくらべると長い間みずからの文字をもたなかつたため、中國側の史書には中國と關連するかぎりにおいてのみ——多くは朝貢とか侵入とか人畜物資の掠奪などの場合——一方的に記録されている關係上、しぜん歴史的にもかれらは中國に依存するもの、中國史の一部分、しかも周邊の文化なき野蠻民族にすぎないものとして、あつかわれてきたのであつた。そしてまた、これまではただ中國の貴族的文化觀からだけで、かれらのもつ文化の價值づけがおこなわれてきたが、これは北アジア世界に對する正しい歴史的評價とはいえないであろう。われわれは從來おこなわれてきた中華的歴史觀のかせを超えた北アジア自體の歴史世界の構造と發展とを考えねばならない。それでは北アジアの遊牧文化圈においては、いつごろから歴史的世界が成立したのであろうか。

二 北アジアにおける歴史的世界の成立と展開

北アジアにおける歴史世界の形成は、紀元前三世紀末の匈奴遊牧王國の建設以來のことといえよう。この遊牧國家の建設者は冒頓ボクトンであるが、その建國の事情は、史記(卷一一〇匈奴傳)に傳えるところによれば、つぎのとおりである。

ボクトツは、秦の始皇帝のころ匈奴族の首長であつた頭曼トマンの子として生れた。そのころ北方において優勢をほこつていたのは、東方の熱河（シラ・ムレン流域）からチャハル方面に遊牧する東胡族（モンゴル系）と、西方の河西地方（甘肅西部）に占居する月氏族（トルコ系）とであつた。匈奴族はトマンの統率の下に、オルドス地方から陰山附近にいたが、東胡・月氏の強族にはさまれ、そのうえ南方からは秦軍に制壓されて、オルドス地方を失うという不利な態勢にあつた。そのうちボクトツは、かれが苦心してそだてあげた強力な近衛兵團をもつてクーデターをおこし、父およびそのとりまきの人びとを誅殺して、匈奴部を中核とする部族連合體の首長になつた。この年を史記の注釋家徐廣は、秦の二世皇帝の元年（306 B.C.）にあてている。ついでボクトツは、すぐれた知謀をもつて東胡族を撃滅し、轉じて西方の月氏族を走らし、またそのころ中國が項羽（楚）と劉邦（漢の高祖）との抗爭のさなかにあつたのに乗じて、オルドスの故地を回復した。のちさらに、かれは北方の渾廆・屈射・丁零テユルク・鬲昆キルギスなどモンゴリアのオルコン河畔からシベリアのイエニセイ河上流域一帯にわたるトルコ系諸部族を服屬して、ここにはじめて北アジアに匈奴部を盟主とする一大遊牧國家をきざきあげるこゝになつた。

以上が史記にみえるボクトツの匈奴遊牧國家建設の概要である。このことを史記には最後にしめくくつて「ボクトツにいたつて匈奴はもつとも疆大になり、ことごとく北族を服屬し、南は中國の敵國となる」というが、これは司馬遷も、南方の漢帝國に對立する政治的統一體としての匈奴遊牧王國が、北アジアにおいてもボクトツの出現によつて成立したことを、みとめているものと考えられる。さらにまた、漢民族が匈奴王國を自己に對立する自主的な特殊世界と確認するようになったのは、漢の高祖がボクトツにかこまれて屈辱的な和約を結んで以來のことである。すなわち漢の高祖は中原を統一すると、匈奴の侵入を防衛するため、みずから軍を率いて匈奴に挑戦したが、かえつて平城（山西省大同）附近の白登臺にかこまれ、陳平の謀略によつてやつと脱出することができた。ボクトツのおそるべき實力を、まのあたり知らされた高

祖は、匈奴と争うことの不利をさと、ついに宗室の女を公主としてボクトツに嫁し、さらに毎年一定額の生絲・絹織物や酒・米などの諸物資をあたえて兄弟の約をむすんだ。これはあきらかに漢側の屈服である。このように漢民族が、みずからをそれまでのような普遍的世界者から特殊的世界者に限定すべき自覺に立たされたことは、要するに東アジアの歴史的世界である秦・漢帝國に對して、北アジアの歴史的世界である匈奴王國が現實に成立したことを示すものである。

匈奴王國は、いまのべてきたようにボクトツによつて創建されたが、その後老上・軍臣の二單于センウ（皇帝）の時代に、その領域をモンゴル高原はもとより、南はオルドス・河西地方、東はマンチュリア、西はズンガリア（西北モンゴリア）からトルキスタンにいたるまで擴大して極盛期を現出した。そして、その國家的構造も、ひととおりの秩序づけられたが、かように匈奴が、その國力をめざましい勢で増強していつたうらには、當時におけるかれらの高度に發達した金屬生産力があつたことを見のがしてはならない。

というのは、さきにもいつたように、ボクトツがイエニセイ河上流域に占居していたと思われる丁零族・鬲昆族などの諸部族を征服すると、この地方に榮えていたスキート・サイベリアン系の金屬文化（ミスシンスクを中心とするクルガン文化）が、直接に匈奴國內にとり入れられるようになり——これ以前からイエニセイ河上流域とオルドス地方とは、丁零族・鬲昆族などを媒介にして交渉はあつたと思われるが——その本地である綏遠・オルドス地方を中心に、青銅金屬器文化とくに矢鏃・短劍・斧頭・甲冑などの武器類から馬面・くつわ・革金具などにいたる馬具類の製作がさかんになつて、かれらの戦力増強に大きな寄與をすることになつた。すなわちシベリアの青銅器文化が、匈奴の中心部オルドス地方に直輸入されるようになる、匈奴王國の青銅器生産は急に増大したようである。このことは遺物のうえからオルドス青銅器文化の盛期が、紀元前五〇〇——前一〇〇年ごろと推定されることと矛盾しない。この金屬生産力の發展が、匈奴族をして北アジア世界を制覇する原動力となつたものと推察される。そして、それとともに、その軍事組織や國家の機構も充實・整備されていつ

たのである。

ところが一世紀なかばすぎから、さしもの匈奴族もおとろえると、シラ・ムレン流域に興つた鮮卑族が、モンゴリアに勢力をえはじめた。そして二世紀なかばごろ、そのなかから檀石槐タンセキカイという部長があらわれると、敗殘の匈奴部および他の遊牧諸部族をも吸収して、鮮卑遊牧國家を建設した。後漢書(卷二〇鮮卑傳)に「南は中國の縁邊から、北は丁零族テユルクをふせぎ、東は扶餘族をしりぞけ、西は烏孫族をうち、ことごとく匈奴の故地による」というほどの大勢力となつた。そのうち三世紀なかばごろから、鮮卑族も宇文部・慕容部・段部・拓跋部などに分裂すると、ボヨウ部は中國に入つて五胡十六國の一である前燕國や後燕國などを建て、タクバツ部も長城地帯および北中國を領域とする北魏王朝(386—534)を興した。

この北魏朝に對抗して、四世紀後半ごろからモンゴリアに柔然族ジュウゼンが勃興し、五世紀はじめ同名の遊牧國家を建設した。^②柔然族の北アジアにおける覇權は六世紀なかばごろ(551)までつづいたが、やがて突厥族テユルクにかわられた。テユルク族もモンゴリアを中心にズンガリア、トルキスタンにまたがる廣大な國家を建て、約二百年間北アジア世界を制壓した。テユルク王國に代つたのは廻紇ウイグル(回鶻)部であるが、ウイグル部は八世紀なかばごろ(755)懷仁可汗のときモンゴリアを統一してウイグル王國を樹立している。この國は約百年つづいたが、九世紀なかばごろ(840)崩壊して、ウイグル部族の大半はモンゴリアから東トルキスタンに移動し、有史以來そこに勢力をえていたイラン族を驅逐した。今日中央アジアを一名トルキスタン(トルコ族の住地)とよんでいるのは、このとき以來であるが、ウイグル族は古代トルコ族のうちでも、もつとも重視すべき文化をのこした部族である。

ウイグル王國の崩壊、それにつづくウイグル部族のモンゴリアからトルキスタンへの移動は、北アジア世界に民族分布上からも國家形成上からも、大きな變動をあたえることになつた。というのは、六世紀以來テユルク部、ウイグル部と三百餘年にわたつて北アジアに樹立されたトルコ民族の覇權が失墜すると、その後トルコ民族の勢力は北アジア世界からき

えさり、かわつてモンゴル民族が北アジアを制覇して現代におよんでいること。また國家の形成上からいえば、ウイグル王國の崩壊後、北アジア世界には、後述するように、征服王朝がつきつきに成立して中國の一部または全土を征服・支配し、それまでの遊牧王國とは異つた形態の國家を形成し發展させたことなどが指摘されるからである。

さてウイグル王國滅亡のち約半世紀間は、北アジア世界には混亂がつづいたが、一〇世紀のはじめ興安峯東地區のシラ・ムレン流域に契丹族キタイが勃興すると、マンチュリア、モンゴリアを統一し、さらに長城をこえ北中國の一部をも征服して遼帝國を建設した。

遼朝の國家組織をみると、これまでみてきた匈奴以下の遊牧諸國家とは、いちじるしく異つていふことにきづくであろう。すなわちこの國は、北アジア世界と東アジア世界とにまたがる征服王朝として、中國的な君主專制の官僚體制をとつた。その君主の地位も長子世襲の單一制となつてゐる。遼朝をうけた金朝は、北マンチュリアから興つた女眞族ジュルチンの建設した國家であるが、この國もマンチュリア、東モンゴリアおよび淮河以北の北中國を支配する征服國家となつた。金朝は女眞族をあげて中國本土に移り住んで約百餘年（1125—1234）の命運を保つた。そのうち金朝にかわつたのはモンゴル族であるが、モンゴル族は一三世紀はじめ太祖チンギス・カーンに率いられて史上空前の大帝國を建設した。かれらは一三四年金朝をほろぼし、さらに南宋も併呑して、ついに北アジアと中國全土とを領有する征服國家元朝をたてた。その後一七世紀に興つた滿洲族の清朝も、同じく北アジアと全中國を征服支配した。遼朝以下の金・元・清の諸帝國は、いずれも中國征服王朝といふべきであらう。

三 北アジア世界における國家の類型

以上、北アジアに興亡した匈奴・鮮卑・柔然・突厥・廻紇・遼・金・元・清の諸國家を通じてみると、九—一〇世紀に

おけるウイグル王國の滅亡をさかいに、それ以前の匈奴王國からウイグル王國にいたる一連の遊牧國家型と、遼朝にはじまる金・元・清などの中國征服王朝型との二とりの國家類型がみとめられる。そのうち遊牧國家型に共通する性格を抽きだしてみると、つぎのようなものがあげられるであろう。

1 地理的には、北アジアを終始活動の場とする。したがつて、この型に屬するものは、中國に對しても一時的に侵入して人畜を掠奪することはあるが、かれらが中國本土に本格的に征服戦や移住をくわだてたことはない。

2 その社會は遊牧社會であり、國家の體制は遊牧部族的である。一例として匈奴遊牧王國についてみると、單于ゼンツ（皇帝）を頂點に、特定の若干氏族によつて占められる二四の大官がある。單于是國內の全部族を統治するとともに、國家の祭祀も主宰する。すなわち匈奴では、正月と春五月と秋九月の年三回諸部族長や貴族らが集つて、單于の司會で國家の祭典を行い、部民の安全、家畜の繁殖を祈つて天地鬼神を祀り、また租税の賦課や國家の大事についても協議する。これは要するに、天地鬼神を祀ることによつて部族的結束を固めるとともに、單于の統裁下に諸部族の連合會議を開き、國家の政治を圓滑に運營するためである。いかえれば、單于是祭祀をつかさどることによつて、遊牧國家の政治的指導權をにぎつていたものであろう。また單于から漢の皇帝に送つた書面に「天の立てる所の匈奴大單于」とか「天地の立てる所、日月の生む所の匈奴大單于」などと書きだしているところからもうかがわれるように、單于是つねに部民に、かれらが尊崇する天神・地祇・日神・月神の護助の下にあるものと信じさせることによつて、その統治權力を精神的にうらづけ權威づけていたこともわかる。單于是、支配部族内の特定氏族である鞏鞏ランタイ氏の中から全部族長や貴族らの協議によつて選出される。もつとも、このような一族の世襲も、やがてさらにせばめられて、建國者の血縁のもの——父子・兄弟——のみにかぎられるようになる。はじめ單于一氏族長であり、部民全體から選ばれた軍事的指揮者であつたものが、そのうち軍事力を手中に收めると、みずから氏族から分離・對置させ、ついに世襲的支配者になる。こうして北アジアの遊牧民

族の間でも、氏族共同體の中から階級的社會が胎まれてゆくのである。

匈奴では、單于氏族である鞏鞏氏のほかに呼衍氏・蘭氏・須卜氏・丘林氏などの異姓があり、これらは單于氏族と婚姻を結ぶなり、そのほか特殊な關係に立つことによつて、特權階級として政治を獨占する。匈奴王國における二四の大官は、多くこれらの特權的氏族によつて世襲されたようである。これらの諸大官は、また一萬の騎兵を徵集するに足る部民と牧地とを領有し、その下には千長・百長・什長などの部臣があつた。一般部民は部落に組織され、一落は平均三——五帳幕（一帳は五——七人）から成り、この落が數個集つて邑落をなし、小部長を置いて統べさせ、邑落を總合して部を形成していったようである^①。

以上によつてみると、匈奴の社會には氏族共同體的構成がまだ溫存されており、したがつて、國家といつても嚴密には、部族制的國家あるいは部族連合體的國家であるといえよう。匈奴王國が、その極盛期に領土を東・中・西の三大部に分割して統治したといわれるのも、このことをうらがきするであろう。匈奴以後の遊牧國家である鮮卑、柔然、テュルク、ウイグルなども、匈奴王國の社會とほぼ類似した部族體制であつたと考えられる。たとえば、鮮卑王國も國內を東部（二〇余邑）・中部（一〇余邑）・西部（二〇余邑）の三大部にわかち、それぞれ數名の大人（部長）^{タイジン}を置いて統治させたといひ、またテュルク王國にしても、東・西にわかれた上、西テュルクにみるように、領内をさらに一〇姓（二〇部）^{オユル}五咄陸部・五弩失畢部^{シビル}に分統したり、あるいはまたウイグル王國が九姓鐵勒部から出自して、九姓ウイグルの名でよばれているなどがあげられよう。

3 經濟上からみると、北アジアとくにモンゴリア本地（北モンゴリア）に根據しながら、國家の經濟的基底を、牧畜のほかには必ず東西交通路——東アジア世界と西アジア世界または南アジア（インド）世界を結ぶ交通路——を支配することによつて、そこからえられる通關稅的な收奪におく。すなわち北アジアに成立した遊牧國家は、つねに西方の中央アジア

(東・西トルキスタン)における諸國・諸部族を征服して東西交通路をおさえ、これを利用する隊商と共生的關係——一方は交通上の安全を保證され、他方はその代償として經濟的利得をうける——に立つことによつて國家の財源をうるわけである。これについては、匈奴をはじめ柔然、テュルク、ウイグルなどが、いかに東・西トルキスタン地方に執心していたかを思いおこせば充分であろう。世祖クビライ以前——元朝の建國以前——のモンゴル帝國の支配者たちにとつても、中央アジアの方が中國よりもはるかに過大に評價され、またそのゆえに西域人が重く用いられたのである。

4 遊牧王國と中國との關係をみると、平和友好的關係にもとづく朝貢貿易と、抗爭的關係に立つ侵略と討伐があげられる。朝貢貿易は、中國側からいえば羈縻キビ關係を前提とする。羈縻とは、中國世界から北アジア世界に對して働きかける政治的形式である。具體的にいえば、(イ)北アジアの主權者たちは、中國の宗主權に服して使節をつかわし朝貢する。

(ロ)中國側はその代償として、かれらが領内の諸部族に對してもつ行政權や徵稅權をそのまま認容する。(ハ)北アジアの主權者をはじめ貴族らに對して、中國の官爵を授けたり、あるいは公主(王室の女)を降嫁することなどがあげられるであろう。このような羈縻政策は、北アジア民族にかぎらず周邊の異民族に對して行われてきた中國の傳統的政策であるが、しかしこの羈縻政策がその實效をあげるには、中國側に武力・權威・權力および經濟力などを總合した強い國力が必要となわなければならない。

朝貢は、このような羈縻關係の上に成立する外交的・經濟的な形式である。すなわち北方の遊牧國家は、中國に毛皮・馬・牛・羊・駱駝などを進貢するが、その貢物に對して中國は、金・銀や米・麥・粟の食糧をはじめ絹・帛の織物や衣類・漆器・陶磁器・香料ないしは裝飾品・調度品など、およそかれらの欲する莫大な物資を賜與する。これは中國側からすれば、その豊かな經濟力にものをいわせ、相手に利を喰わせて懐柔するという政策であり、中國の異民族に對する支配の一形式である。他方北アジアの諸國・諸民族にとつては、これは最も有利な交易であり、合法的な物資の獲得であるため、

かれらもこのような貿易は好むが、しかし、かれらとしては遊牧國家を形成した後は、中國の宗主權をみとめるなどの意志はなく、朝貢貿易をつねに對等な國交にもとづく貿易と考え、中國側のいう賜與を、あべこべに中國からの幣物または贈物とみなして強要する。

ところが、南北兩世界が抗爭關係にあるときは——兩者がこのような鬭爭關係に立つのは、いろいろの原因があるであろう。たとえば、遊牧國家における經濟的な欲求度が高まつてきて、貿易によつてうる物資の不足分を、非合法的手段を通じてでも補わねばならなくなつたばあいとか、あるいは遊牧國家の内部において階級的分化が激しくなつた結果、それによつて生じる社會的矛盾を克服するために、中國への侵略戦が起されるばあいもあろうし、あるいはまた、中國との政治的・外交的原因によるばあいもあろう。そのほか漢の武帝などにみるように、中國側から積極的に武力討伐を加えるばあいもあるであろう——北アジア民族は、中國の豐饒な農耕地帯に對し、たえず恣意的な物資・人畜の掠奪をくりかえす。そのため中國側は、多くのばあい防禦的立場をとらざるをえなくなり、ときとしては羈縻的な懷柔手段を併せ用いて、その侵略をくい止めようとする。

要するに、南北兩世界に強力な國家が對立するとき、武力いつてんばりな北方側のはたらきかけに對する南方中國側の應手は、つねに軍事力・經濟力・外交術策および文化工作などを総合した對策であるが、この二つの原動力——北の武力と南の總合對策——が平和的にせよ、あるいは抗爭的にもせよ、相互に作用し反撥しあつてゆくところに、兩世界の歴史的發展がくりひろげられるのである。

つきに征服王朝型に共通する歴史的性格をあげてみると

1 この型に屬するものは、地理的には長城地帯（元朝）か、シラムレン流域（遼朝）を本據とするか、あるいはマンチユリアの松花江流域（金朝）か、渾河流域（清朝）などの中國に比較的近いところから興つており、さきの遊牧王國がいずれ

も北モンゴリアに根據したのとは異なる。^⑥

2 征服王朝にはモンゴル系の民族（遼・元）とツングース系の民族（金・清）とがあり、前者が遊牧民族であるのに對し、後者は狩獵・半農耕民族である。

3 征服王朝は中國または朝鮮に比較的近い地域から興つたため、かれらは當初から中國や朝鮮の北邊に侵入しては、農民を集團的にかすめて領内に徙したり、あるいは投降する農耕定住民を收容するなどして、これらの農耕民と本族の遊牧民ないし狩獵民とから成る牧農的政權を形成する。

この時期に、かれらの北アジア世界の制覇がほぼ完了する。そして領内にうつした農耕民たちの生産力を基盤に國力を増強するが、それとともに國家の内部における階級的分化が、しだいに進展しはじめた。その激化を緩和するか、またはさけるため、この期をすぎると南方の中國や東方の朝鮮半島、あるいは西方トルキスタン方面に對するかれらの侵略・征服戦が積極的に、かつ組織的に推し進められる。このころにおけるかれらの侵略戦・征服戦は、決して恣意的なものではなく、常に一定の方向と秩序をもっている。それが遼朝では太宗の幽薊十六州——いまの天津・北京・大同を連ねる以北の地——の領有となり、金朝では太宗・熙宗時代の對宋侵略による淮河以北の領有となり、また元朝、清朝の中國征服となつて具體化している。^⑦

一定の方向をもつ侵略・征服戦とは、土地を領有し、被侵略民の統治をめざすもので、それはやがて征服王朝の形成となる。北アジア民族の場合、土地・人民の征服とは主として中國の土地・人民をさす。中國征服王朝は、中國統治にあつては、その支配部族を中國内地に移し、北京あるいは開封に都して漢・唐・宋などの中國人王朝と一見かわらない國家の體制を套襲する。ひとり遼朝だけは終始北アジアの本地に根據したが、そのかわりこの國は、北方の領内に中國人を集團的に移し、多くの州・縣を設置している。いずれにせよ中國征服王朝は、北アジアと中國——一部または全土——との

兩世界を支配する國家であるため、その社會は北アジア諸部族によつて構成される遊牧的社會と、被征服民の中國人を中心とする農耕的社會との複合制であることが特徴といえるであろう。そしてその國家經濟は、多く農耕社會からの收奪によつてまかなわれる。

4 征服王朝が、このような遊牧民社會と農耕民社會との複合制である以上、その政治組織も、それに適應するような複元的體制をとらざるをえなくなる。これについては、もつとも的確に示される遼朝に例をとつて説明してみよう。

遼朝は統治の大方針として、遊牧民である契丹人ないし北方諸部族に對しては固有の部落制（北面制）を、中國人に對しては中國在來の州縣制（南面制）をしくという二元的な政治體制——ただしその根柢には、國家の樞機、軍國の大權は契丹人（北面）の掌中にきつて、中國人（南面）は參與させないという、契丹人による一元主義が基調をなしてはいたが——をとつている。このような二元制は、制度の上だけでなく法制・服飾・儀禮の類にまでもうかがわれるが、この多元的な統治型態は、多少の差こそあれ、その後の金・元・清の諸王朝においても、一樣にみとめられるところである。

5 征服王朝治下の遊牧族社會をみると、前代の諸遊牧王國の社會に溫存されたような氏族共同體的部族制は、しだいに解體されて、統治者との封建的關係にもとづく部族の改編が行われている。遼朝における太祖の一八部編成、あるいは聖宗の三四部編成とか、また金朝の猛安・謀克制の確立とか、あるいはまたチンギス・カーンによつて創設された千戶制度などは、いずれも從來の氏族共同體的體制を止揚して、統治者との封建的關係にもとづく新部族制の編成にほかならない。つきに國家機構についても、可汗（皇帝）は遊牧王國時代の單于とは異り、中國的專制君主としてその權力はいちじるしく強化され、その位は父・子・孫による單一の世襲制となつている。またカーンを頂點とする支配官僚層と被支配層との間には、強い封建的關係がみとめられる。

5 征服王朝は、いままでのべたような地理的その他の事情から、中國人との接觸は早くかつ深く、それにつれて中國文

化も採り入れているが、同時にかれらの間には、民族的自覚がしだいに高まつていつた。いまあげたかれらの特色ある政治體制も、その一つのあらわれであるが、契丹文字（遼朝の國字）にはじまる西夏文字（西夏朝の國字）・女眞文字（金朝の國字）・パспа文字（元朝の國字）・滿洲文字（清朝の國字）などの國字の創製は、このことを端的に示すものといえよう。たとえば契丹文字についてみると、この文字は遼史の傳えるところでは、ウイグル字と漢字とに學んで創られたものである。^⑨

がんらい、言語とよい文字とよい、もつともよく民族精神の消長を示すものと考えられるから、かように一民族が独自の文字を作成して、みずからの思想を表現しようとしたことは、たんなる漢文化の模倣ではなくて、あきらかに民族的自覚にうらづけられたものである。もつとも契丹文字以前にも、北方にはテュルク文字、ウイグル文字などがあつたが、しかしそれらは漢字・漢語とはなんらの關係もなく、契丹文字のように表音文字・表意文字をもち、その字形に漢字の形をとり入れながら、しかも漢字とは異なる独自の文字を創りあげたということは、あきらかにかれらの中國文化への對抗意識のあらわれと考えざるをえない。こうして國字製作の風は、その近隣の諸國や諸民族に大きな影響をおよぼし、やがて遼の西隣に建國したタングート族の西夏國では西夏文字が、ついで東隣の金朝では女眞文字が、また元朝ではパспа文字が相ついで創りだされている。ウイットフォーゲル氏は、この契丹文字や遼朝の政治組織、軍事組織および敘任の制などを、契丹人固有のものでも中國人の傳統でもない、相互の適應性から創りだされた新しい特性として、これを第三文化と稱している。^⑩

國字の創製と同様に、遼以下の征服王朝では國史や實錄の編纂もおこなわれている。これは一見すれば中國人王朝のそれを模倣したにすぎないように見えるが、しかし、それは單なる模倣ではなく、中國征服者としての北アジア民族が、自己にめざめて、みずからを意識しようとする努力を示したものと考えられるであろう。たとえば征服王朝において、遼朝が北宋に對して兄、金朝が南宋に對して君ないし叔・伯の名分を強要しているのも、從來は遊牧王國と中國との間の羈縻・朝貢關係においてみたような中華尊重の觀念はみとめられないで、實力にもとづく評價が行われたものといふことができよう。

元朝・清朝にいたつては、全中國の支配者として君臨したので、これまで南北に對立した二つの世界が、一つの國家——征服王朝——に包攝されてしまつた。その結果、兩世界をいかに調和し統制してゆくべきかが、支配者たちの最大の課題であつた。とくに清朝の當路者たちは、このためあらゆる政治的工作や融和政策をとつてゐる。

なお、このように考えるならば、同じく征服王朝とみなされる北魏朝が例外として殘されてくるが、北魏の時代には、モンゴリアにおいてこれと對抗した柔然族が、遊牧國家を建設して北アジア世界を制覇していたため、北魏朝は遼・金・元・清のように、北アジア世界と東アジア世界との双方にまたがる國家ではなかつた。したがつて北魏朝は、中國征服王朝の祖型をなすもの、あるいは前期的征服王朝とも考えられるが、北アジア史の立場においては、遼・金・元・清の諸王朝とは同義的には扱いがたいように思われる。したがつてその國家的性格にも多少異なるものがあるので、北魏朝については別の機會に、あらためて考えることにしたい。

四　む　す　び

さてわれわれは、これまで北アジアにおける歴史的世界の成立とその展開をのべ、そこには東アジアの中國的世界とは別個の歴史世界が存在したことを論述した。そしてつぎに、この世界に形成された諸國家に、遊牧國家と征服王朝との二つの類型がみられることと、それらにそれぞれ共通する歴史的性格についても考察を加えた。

ところが、つぎに考えられるのは、この類型化された二つの國家型態の間には、はたして歴史的發展がみられるかどうか、いいかえれば、それは北アジアの歴史的世界に對する時代區分の問題ともつながるが、これについては別稿「北アジアにおける歴史世界の形成と發展」(ハーバード・燕京・同志社東方文化講座)において詳論したから、ここではその結論だけをのべるにとどめたい。すなわち紀元前三世紀末から紀元九世紀にいたる遊牧國家の時代は、それらの國家機構・社會

構成などの點からみても、すでにのべたように、多分に氏族共同體的性格を温存する部族制國家の時代といへば、したがつてその發展段階は、古代的であると考へられる。また一〇世紀にはじまる遼帝國以後の征服王朝の時代は、遊牧王國時代の部族制が、統治者との關係において封建的に再編成され、國家の統治機構も封建的官僚體制をとつてゐる點などから推して、これを中世的とみることができるであらう。最後にそれでは、北アジア世界の近代化はいつからはじまるかといへば、それは北・南モンゴリアに十九世紀末から今世紀はじめにかけ、ロシア人や中國人の勢力が急激に浸透した結果、モンゴル人による政治的獨立や社會經濟的變革がこころみられはじめた以後、とくに北モンゴリアにおける獨立運動期(911-21)からであると答へたい。

(一九五六、二、一)

註

- (1) 貝塚茂樹 「中國古代史學の發展」 王國維 「鬼方・昆夷・獯豸考」(觀堂集林一三)、小川琢治 「北支那先秦蕃族考」(内藤博士還曆記念支那學論叢)、同上 「穆天子傳考」(狩野博士還曆記念支那學論叢) 内田吟風 「周代の蒙疆について」(東洋史研究四卷四・五號)。
- (2) 柔然は中國の史書によれば、東胡の後たといわれる。漢字では柔然のほかには蠕蠕・茹茹・芮芮・曷曷などいろいろに書かれるが、いずれも柔然に類似する發音の漢譯であらう。柔然がどのような人種であつたかは、現在までのところ明らかでないが——西方の記録にみえるアヴァル族(Avars)だとする學者もあるが、まだ定説化しない——かれらがモンゴル語系のことばを使用していたことは確かである。
- (3) 嚙躠氏については、後漢書卷一一九匈奴傳には虚運題氏と書くが、嚙躠も虚運題も、おそらく同じ音を寫した異字であらう。
- (4) 匈奴の國家組織や文化などについては、江上波夫「ユウラシア古代北北アジア世界における國家の類型」(田村)
- 方文化、内田吟風「匈奴史研究」、護雅夫「匈奴の國家」(史學雜誌五九)など参照。
- (5) ヤクボフスキー、グレコフ共著 播磨橋吉譯「金帳汗國史」、飯塚浩二「世界史における東洋社會」参照。
- (6) 元朝を世祖(クハシラ)以前のモンゴル遊牧帝國(太祖・太宗・定宗・憲宗)とは區別して、中國征服王朝とみれば、元朝は世祖が中統元年に上都開平府(内蒙古自治區、多倫附近)に即位したときに建國されたわけであるから、やはり長城地帯から興つたものとみてもよからう。
- (7) 田村實造「アジア社會の後進性と遊牧民族との歴史的關係」(ユーラシア學會研究報告第一、遊牧民族の社會と文化 一九五二年)参照。
- (8) 津田左右吉「遼の制度の二重體系」(滿鮮地理歴史研究報告第五)、田村實造「遼の太宗北支准出の一考察」(蒙古學第三)、島田正郎「遼代社會史研究」, 同上「遼制之研究」, K. Wittfogel; History of Chinese Society Liao, など参照。

(9) 契丹文字については田村實造・小林行雄共著「慶陵」第六章四節
契丹文字の哀册参照。

(10) K. Wittfogel: *ibid.* General Introduction p. 20.